



TITLE:

静脩 Vol. 1 No. 2 (1964.11) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 1 No. 2 (1964.11) [全文]. 静脩 1964, 1(2)

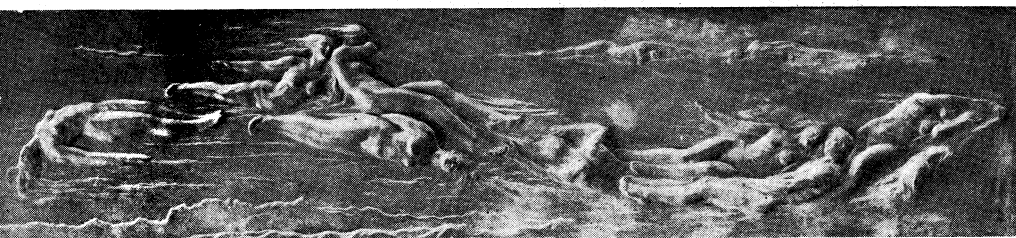
ISSUE DATE:

1964-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65904>

RIGHT:



The Kyoto University Library Bulletin

静脩

1964年 11月

Vol. 1, No. 2

雲

鯨坂二夫

「京都大学に雲がある」——このことを知る人は少ない。それは、すぐれた美のかたちを秘めながら、静かに、ほんとに静かに流れている。大学の正門をはいて、正面に樟の木。玄関の石段をあがって見あげるがいい。そこに「雲」がかかげられてある。(原型は附属図書館の玄関にあり) 中央より右にたくましい肉体を斜めに流した2人の男像。自由と憧憬とをその全身に秘めて、1人はその右腕に美しい女像を抱く。誘うがごとく、また、かばうがごとく。左手はつつましく膝に。そうして、それにつれそう美しい肢体の女像が、すべてをささげるほどの情念をこめて、眸は男像の顔に注ぎ、右手をわずか斜めうしろにひろげる。

左の四つの女像の1人は悲しみに顔を覆い、その爪先きに背面の男像が手をさしのべているのは何の意味であろうか。遠景の三つの女像は、文字通り水平に流れて、遠い日の思い出を追う。

齊藤素敵作のこの「雲」は、夢見るがごとく流れたわむれる男女の群像からなりたっている。私のようなものでも、その下にたたずんで、ブロンズに浮き彫りされた「雲」を見上げると、不思議な感動を覚える。それは昭和のはじめ、この大学に入学した喜びにひたったころでも、現在、そこに職を奉ずるようになった日にも、何のかわりもない。

「雲」が作られたのは、大正13年、軍閥はなやかな時であった。この男女の裸体の浮き彫りが問題になったのは当然である。そのもつ芸術的な価値や、品格というようなものが、それにふさわしく評価されないばかりか、かたくなな旧来のものの考え方、見方は、やがて美の世界への圧力となって、この「雲」の上にも不当な嵐を呼び起こす気配さえもあらわれ、これを芸術品として、その嵐から守ろうという識見の人のないままに「雲」の行方はあやぶまれた。

その時である。京大総長荒木寅三郎先生は敢然としてその「雲」を京大に引きうけ、それを正面玄関に高くかかげられたのであった。以来「雲」は京都大学のあゆみとともにある。学問の真理と研究の自由を背骨とする大学は、また、美の擁護者でもあったのである。

それ以来、この学園に起きたさまざまなできごと、そこに伝わる数々の歴史を秘めて「雲」は流れ続けている。いま、この「雲」の下にたつて、それを仰ぎ見るひとたちは、この事実をはたして何と感じているであろうか。(教育学部教授)

大学図書館近代化の動き高まる

本年9月1日に文部省から発行された「わが国の高等教育」の中で、大学図書館の役割と問題点について、次のように指摘されている。

「大学図書館は、大学における教育および研究活動が活発に行なわれるようにするための基本的な施設である。すなわち、大学図書館は単に文献（図書・資料）を保管するにとどまらず、文献の効率的な利用を図り、積極的に学生、教官および研究者に協力すべき重要な役割を有している。

わが国の大学図書館は、戦後の新制大学発足当初の事情もあって、各大学間に大きな格差がある上に、各大学図書館の組織および機構が未整備であり、管理運営面でも非合理的な面が多く、その施設、設備の整備計画も教室、研究室等の整備が優先されてきたため、近代化の点で非常に遅れをきたしている（同書 113頁）。

大学図書館の近代化の遅れを克服するため、大学図書館関係者の努力が続けられていることは言うまでもないが、最近この近代化運動は各方面の強力なバックアップを受けつつある。

（1）大学設置基準等研究協議会 図書館特別部会

昨年9月、中央教育審議会の答申に沿って、新しい大学設置基準を再検討するため、文部省大学学術局大学課に大学設置基準等研究協議会が置かれた。そして現在の設置基準における図書館に関する項目がきわめて雑駁であることが指摘され、これを検討するため、4月23日の協議会総会で、図書館特別部会を置くことが決定された。

この特別部会には、本館から堀江館長が委員として加わり、今日まで、6月17、18日に第1回、6月30日、7月1日に第2回の会合が開かれ、協議会に対する中間報告がまとめられている。

（2）学校施設基準規格調査会 大学図書館小委員会

文部省管理局では、学校施設の基準ならびに規格を設定するために、学校施設基準規格調査会を設けて、調査審議しているが、大学図書館の施設基準の設定のため、大学図書館小委員会が38年秋から発足した。本館からは岩猿整理課長が専門委員として参加している。

委員会は毎月1回開催され、本年10月21日には、すでに11回目の委員会が開かれた。委員会ではこの1年間、大学図書館施設の根底となる大学図書館の機能、活動について調査、審議を重ねてきたが、このような図書館機能を生かすべき施設基準の検討に今後重点がおかれるであろう。閲覧人員、増加図書等の量的増大に悩まされ、さらに近代化への飛躍的脱皮をせまられている大学図書館関係者の委員会に寄せる期待は大きい。

（3）国立大学協会第1常置委員会

全国の72国立大学付属図書館で組織している全国国立大学図書館長会議は、1昨年来、国立大学協会に対して、大学図書館に関する特別委員を設置して、大学図書館の整備充実のための対策をたてるよう要望していた。これに対し、国立大学協会は4月25日の役員会でこの要望をとりあげ、第1常置委員会でこの問題を検討するよう付記した。第1常置委員会委員長は、その後本田弘人熊本大学長に変わった。9月25日、館長会議を代表して東大伊藤館長が本田委員長と、この問題について話し合いを持たれたが、本田委員長はきわめて好意的であったと伝えられている。

（4）日本学術会議

日本学術会議では、さる昭和36年5月、池田首相に対して、大学図書館の整備拡充について勧告を行ったが、その後も、ドキュメンテーション研究連絡委員会で、大学図書館の

問題が検討されてきた。

しかし、さらに大学図書館の近代化をおし進めるため、ドキュメンテーション研究連絡委員会のほかに、長期研究計画調査委員会を始め、5つの常置ならびに特別委員会から、1人ずつ委員が出て、委員会連絡会議付置の「国立大学附属図書館に関する小委員会」（委員長北川敏男九大図書館長）が設けられた。この小委員会で、大学図書館の近代化のための基本構想が検討され、そこでまとめられた要綱が10月28日から開催された第42回の学術会議総会に、ドキュメンテーション研究連絡委員会ほか5つの委員会の連合提案として提出され、総会第2日目の39日に採択された。したがって総会后、大学図書館の近代化に対する勧告が、学術会議より正式に政府に提出されることになる。

私の読書と図書館

安井 郁子

苦しかった試験もやっと終りほっと一息ついたところである。これからしばらくは勝手に本が読めることがうれしい。なんでもいいから、むちゃくちゃに読んでやろうと思う。大学にはいったものの、本は読んでないし、なにもしないで、ひどい劣等感を持っていたが、そういう時いつも図書館へ行った。教養部図書室では自由に本がさわれないので不便だが、中央図書館では、特に閲覧室の中に開架図書室が移ってから、多くの本を手にとって見ることができるようになり、1回生のおわりぐらいからよく中央図書館へ行くようになった。

自分が失望してなんの気力もないような時や、勉強に疲れた時は、本棚のあいだをあちこち散歩する。ここにこんな本がある、これはおもしろそうだななどと思いながら、歩きまわっているうちに、多少なりとも心が満ちてくる。一生かかっても読めないことがわかっていても、なんとなくこの大きな知識のかたまりを全部吸収できるような気がしてくるのである。文学全集なるものを、今まで全然読んでいなかったが、友達の影響で、大学にはいつからゆっく

り読みだした。長編になると、始めの読もう読もうという気持が中頃でなくなり、早く終ればいいと思うようになってしまい、結局は筋しか読まないことになるのだが、それでも何か得たような気がしてくる。教養の1年の内に得たもののひとつに小説の味わいはいる。自分の読書範囲は狭く、自分の進む方面以外のものはほとんど読めない。いわゆる古典と名づけられているもの、その内でも哲学書にあこがれるのだが、自分1人でそれを読んでいくだけの力がまだできていない。広い閲覧室でそういう本を一心に読んでいる人をみると、もっともっと勉強しなくてはとつくづく思う。

私にとっては図書館は、知識欲をかきたてられ、そしてそれを満たしていくことのできる場所である。図書館がもっと良くなるために、図書館に対する要望を書こうと思ったが、今のところすぐ実現できそうなものはあまりない。

場所の狭いこと（特に教養部図書室）、暗い感じがすること、冬の暖房のやり方と換気のこと。教養部図書室は本が少ない。そして中央図書館でも、実際自分のほしい本が少ないこと。開館時間については、日曜日もあけてほしいし、また土曜日の閉館時刻を8時までにしてほしいなどがある。しかし私達利用者も、雑談をやめ、本をていねいに扱って、お互いにより良い図書館を作るように協力しなくてはならないと思う。（医学部2回生）

資料紹介

- **細川家本** 本年7月20日に、熊本市北岡にある細川家宝庫に収められていた漢籍類205部2,682冊が本館に寄託された。永青文庫理事長細川護貞氏は熊本藩主直裔の当主であり、今回寄託の図書も同家伝来の由緒あるものである。

図書の内訳は経書刊本を主とするものであって、中国のものは明版10部・清版16部、その他は日本の刊本類で、時代は江戸時代初期から明治時代初期にわたっている。いずれも斯学研究の好資料である外、藩学の事情をうかがう資料となるものであろう。

- **山田家本** 本年2月20日に山田一夫氏から「校正古語拾遺」以下305点750冊の図書が本館に寄託された。寄託者山田一夫氏は本学医学部出身で医学博士、現在京都府立医科大学名誉教授である。今回寄託された図書は博士の父祖の収集し、あるいは編述されたものの一括で、国文学を主とし、特に、宝徳3年(1450)の年記のある「千載和歌集」の筆写本などが目をひく。

- **松室家本** 本年2月20日に松室竜雄氏から松室本家日記及家記由緒14点が本館に寄託された。

現在の松尾神社の摂社月読社の創設は遠く顕宗天皇3年にさかのぼるが、松室家は創設以来累代この社の禰宣職を専掌し、遠祖には六条天皇の御生母も出した京洛社家中屈指の名門である。

今回寄託された文書類は上記松室家伝世の系譜、家記類および延宝3年から明治8年に至る日記等の集成である。これらは、松室家および月読社の歴史的変遷を伝える資料であるほか、有職故実の典故として、また近世の神社および神道史資料として価値あるものである。

本学への図書の寄贈つづく

■ 故丸岡健次君の収書農学部へ

故丸岡健次君は、昭和38年4月16日、全く突然に他界された。生前に農学部大学院ドクター・コースの2回生に在学中であった同君は、勉学の徒として学界からの期待も大きかっただけにその死が惜まれてならない。

このたび同君の御尊父丸岡秀氏は、その収書444冊を農学部農林経済図書室に寄贈されたが、その図書のどの1冊を手にしても丸岡君のありし日がしのばれる。

■ 復興途上の薬学部へ

昭和37年12月29日未明、火災により全焼した図書室の復興に日夜努力している薬学部へ内外の個人または会社より多数の図書の寄贈が続いている。この紙上をかりて感謝の意を表すとともに、寄贈者名および書名を以下に掲げる。

- Dr. W. T. Sumerford. (米国のミードジョンソン社研究所薬化学部門主任)
Chemical Abstracts ; Vol. 15-57 (1921—1960)
- 石黒武雄 (京大名誉教授、第一製薬KK社長)
薬学雑誌 (明37～昭33)
日本化学総覧 1877～1961
- Dr. E. Schlittler (チバ製薬KK研究部長)
Helvetica Chimica Acta ; Vol. 15-45 (1932—1962)
TETRAHEDRON ; International Journal of Organic Chemistry,
Vol. 15-18 (1961—1962)
- サンド薬品株式会社
Helvetica Physiologica et Pharmacologica Acta ; Vol. 3—20 (1945—1962)

Experientia ; Vol. 1—18 (1945—1962)

- 日本レダリー株式会社

Journal of Colloid Science ; Vol. 1—17 (1946—1962)

Journal of Pharmacology and Experimental Therapeutics ;

Vol. 116—136 (1956—1962)

- 日本新薬株式会社

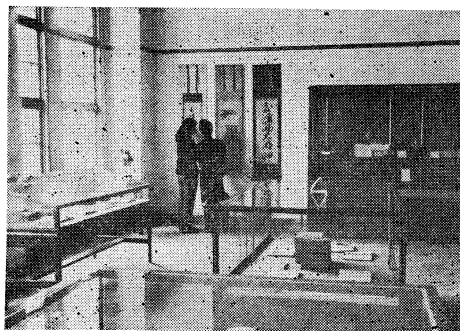
Liebig's Annalen der Chemie ; Bd. 357—628 (1907—1955)

- その他：東大薬学部，京大薬友会，九大薬学部，日本油脂，武田薬工，新三菱重工，台糖フェイザー，三共KK，丸善書店，吉岡書房，U. S. エシアティック・カンパニー，金原書店，京大化学研究所，乙卯研究所，日本ブラッドバンク

北村季吟 展 開 催

—読書週間始まる—

本年1月に新玉津島神社（下京区松原通丸丸南入玉津島町）から同神社宝物40点が本館に寄託されたので，これにちなんで，読書週間中の10月28日から3日間「北村季吟展」を催した。陳列品は宝物中の季吟自筆「道の栄」「季吟日記」以下数点と，同神社保管中の宝物後水尾天皇宸筆玉津島大明神神号」以下数点のほかに，館蔵の季吟著作刊本等を加えた。「道の栄」は同神社内北村季吟大人遺著刊行会からその第1集



として37年9月に初めて出版された珍籍であり，「季吟日記」も第2集として，38年11月に出版されたものであるが，これは旧重要美術品の指定を受けていたものである。

これらの宝物を本館に寄託されることになったのは，稠密の巷を避けて保管に万全を期したいという文化財保護の意味と，いまひとつには，学術研究の上に貢献したいという神社所在町内の方々の発議によるものである。

季吟が，和歌・俳諧の巨匠であり，それ以上に古典文芸注釈の碩学であったことは改めというを要しないが，季吟と新玉津島神社の関係について一言する必要があるかと思う。新玉津島神社の現在位置は鎌倉時代初期の著名な歌人五条三位藤原俊成（定家の父）の旧邸内の一部であって，俊成はここに和歌三神のひとつである紀州和歌浦の玉津島明神を勧請して崇敬したところである。「源氏物語湖月抄」，「枕草紙春曙抄」，「八代集抄」等数々の名著を既に世に送り，季吟としては最後の注釈書である「万葉集拾穂抄」の筆を起して間もない天和3年2月（1683）60才の時，人のすすめにより社司としてここに来住し，元禄2年に幕府に召されて江戸に移住するまでの6年間を，この神社に過したのである。

館内めぐり

図書の出生届け

~~~~~

受入掛

~~~~~

京大の図書館にある本はもちろん，どの学部，どの研究室にある本も，京大での生活を始めることに決定したら，必ず通らなければならないのがこの受入掛だ。京大とひとくちにいても遠くは九州阿蘇の火山研究施設，北海道の釧路，白糠の演習林等のようにその名を冠した施設は，日本中に散在している。このような施設もふくめて，すべての京大

の図書は、この受入掛ではじめて京大生活のうぶ声をあげるになっている。それは京大の図書の管理方式が、全学一体の形をとっており、どの部局で購入された本も、どの研究所で寄贈を受けた本も、まず図書館の蔵書とされた上で、それぞれの任務に服するために散っていくからである。

ここで一応京大の図書に関する数的な統計を見ていただこう。明治30年に京大が創立されて以来、昭和39年4月までに受入れられた本は、和書 1,216,475 冊、洋書 1,052,256 冊、合計 2,268,731 冊となっている。これは、日本の他の図書館と比べると、国立国会図書館、東京大学に次いで多いということになる。昭和38年度中には 69,184 冊が受入れられた。これは1年を通じて、日曜日でも祭日でも毎日 200 冊の本が受入れられたことになる。

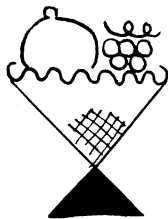
では、受入掛とはどんな仕事をしている掛であろうか。一冊の本がどういう操作を経て京大に籍をおくことになるのか、その流れに従ってみてみよう。本屋の店頭から運ばれてくる場合、外国の港から船にのって運ばれてくる場合、あるいは、会社の社史とか、都道府県の地方史のように、直接送られてくる場合というようにいろいろあるが、本は法律で定められた書類とともに各部局から図書館の受入掛へ運ばれてくる。そこで入籍の日と、入籍順の受入番号とがあたえられる。

そしてすべての本は朱肉のついた大きな蔵書印と、受入番号印をタイトルページの裏に捺される。こうしてはじめてただの本が京大の本に生れかわる。京大の蔵書印を捺された本は、その服すべき任地に従って同じ行き先の仲間とともにボテ箱につめこまれ、トラックの荷台に乗せられ、先生方や学生諸君の待っている学部、研究所へ送り出されるわけである。

こう書いてくると、そんなに大した仕事ではないかのように感じられるだろうが、なかなかどうして、受入掛は、会計検査の対象にも含まれるから、司書の多い図書館の中で、会計掛と同じようにソロバンや計算機が必要であるし、それに加えて、図書を見る司書としての目も要求される。さらにトラックの上に乗って配達もするので、筋肉も太くなければつとまらない。昔、受入掛にいた人で、蔵書印の捺印に情熱をこめて、実に美しく立派な仕事をされた人があった。いつも羽織はかまのいでたちで仕事にのぞみ上下のつり合い、左右の間隔、印肉の濃淡と、一分の隙もない蔵書印であったという。今でも、その人の仕事は書庫に並ぶ多くの本のタイトルページをかざっている。

京大の中で本を読まれる方は、どの本にも、受入掛員の汗が流れていることを感じとっていただきたいものである。

—あ と が き—



文化の月に第2号をお届けできることを大変うれしく思います。創刊号に見たほどの生みの苦労はなかったというものの、教官、職員、学生諸君と広範囲にわたる読者諸兄姉を対象としているだけに、編集員一同懸命に頑張っております。何分にも発行部数に制限がありますので、お読みになった館報は回覧していただき、投稿やご批判をいただければ編集員としては何よりの喜びです。